

## 第1回帯広市総合計画策定審議会第1専門部会 議事概要

1. 日 時 平成20年1月23日(水) 13:30~16:40

2. 場 所 市役所5階フロアー会議室

### 3. 議事概要

協議事項1 部会長・副部会長の互選について

部会長には和田委員、副部会長には小森委員が選出された。

協議事項2 議論の進め方について

事務局が「資料2 議論の進め方」を説明。今後の議論の進め方について確認した。

協議事項3 まちづくりの課題と取り組みの基本方向について

事務局が「資料3 第1専門部会議論シート」を説明。まちづくりの課題と取り組みの基本方向について議論をした。

#### (1) 都市計画について

##### 【委員】

誰にとってもわかりやすく、我がまちの紹介をできることが本来のまちづくりだと考える。

今の結果が良い方向なのか、もし悪い方向ならばこれまでの考え方を見直す必要がある。検証が必要。

##### 【部会長】

帯広の都市計画は、帯広の森の考え方から今日までつながってきた。今後はそれにつながるサステイナブル(持続可能)なまちづくりの視点が重要となる。

##### 【委員】

中心市街地に行きたくなくなるようなまちづくりが必要。

##### 【委員】

中心市街地の範囲はどこか共通認識が必要。活性化への取り組みについては、なぜ空洞化が進んだのかを考えよううえで進めるべき。

**【委員】**

中心市街地では、車社会が進みバス利用が少なくなってきた現状があり、小手先だけでなく抜本的な取り組みが必要である。

世界的にエコが注目される中で、帯広の森をもっと育てる必要があり、これが帯広のアピールにもつながる。

**【部会長】**

中心市街地の問題はコンパクトシティの考え方とつながる。高齢化時代を見据えながら車社会における公共交通機関のアクセスなど、どう考えていくかで方向性が変わってくる。

中心市街地だけでなく、市全体を捉えてみるとどうか。

**【委員】**

中心市街地活性については、まだ結果が出ていない状況にある。個人レベルの利害関係もあり、共通認識に立っていないのではないか。

人口減少によってどうなるのか、マイナス面にも正面から光をあてて共通認識に立ち、方向性を考えていく必要がある。

コンパクトシティについては概念の共通認識が必要。

**【部会長】**

人口減少を前提とするのか、増加をめざすのか、それにより方向性も変わってくる。

**【委員】**

たとえ人口が減少しても住民が満足できるまち、よいと思えるまちでよいと思う。人口減少を前提としながらも積極性を出していくべき。

**【委員】**

施策によってある程度の人口増は図られるだろうが、国全体で減少傾向にある中であって、現実的に見るべき。全国どこでも移住策など図られており、気象条件など様々な条件を考えても、帯広だけ人口増加することは難しい。住民が満足できるまちであるかどうかが大変なことである。

しかし、ただ人口減少を静観するのではなく、帯広の食や観光を活用しながら人を呼び込むなど地道な努力する必要がある。そのためには帯広を認知してもらうことが必要であり、その意味でわかりやすいまちであることが必要。

コンパクトシティの考え方は、合理的、効率的、経済的考え方である。中心市街

地については、人々が行って、くつろぎ、楽しめるものが必要である。

**【部会長】**

これまでの総合計画では、想定人口と現実との乖離が大きい。計画においても方向転換が必要。現実を見据えたまちづくりの対応策が必要ではないか。

**【委員】**

「わかりやすい」というフレーズは必要と思う。計画には理念が必要。

**【委員】**

人口については、無策であってはいけない。他の自治体のプロジェクトなど良いものは取り込んでもよい。

**【委員】**

これまでの計画をベースとしながら、都市に求められるもの、人口減、高齢化など新たな変化への対応をどのようにプラスしていくかを考えてはどうか。

**【委員】**

中心市街地の停滞が課題にあり、どこが中心市街地かとの議論があったが、駅、西2条中心のエリアはそれほど変わるものでないと思う。住まいと店舗が分離されてきている。まちの中に人が集まり、語り合える場があればよい。人が集い高齢者も楽しめるまちになるとよい。

**【委員】**

中心市街地に住んでいる人はその地に思い入れもあるが、市民は中心市街地の活性化を望んでいるのか。

**【委員】**

地域の核として中心市街地の活性は必要である。

**【部会長】**

コンパクトシティの考え方があるが、人口規模はどれくらいがちょうどいいのか。

**【事務局】**

コンパクトシティにおいて、人口規模がどれくらいがいいのかというものはない。人口減少傾向にあってこれまでのように市街地が広がっていくと中心部は空洞化してしまい、これまでに築いてきた都市基盤も無駄が出てきてしまう。市街地の規模

を拡大せず効率的なまちを作っていこうという考えであり、まちの核となる中心市街地の活性化を図りつつ、近郊部や農村部も含めて全体をバランスのよいまちにしていこうというもの。

**【部会長】**

中心市街地だけに人が集まるのは難しいし、人それぞれでまちの中心はどこかという考え方はいろいろあると思う。一部の地域だけが発展すればよいのか、核となる地域がいくつかできるのか、今後も駅周辺を中心ととらえるのかといったことも考えていく必要があるのか。

**【委員】**

どこのまちでもやはり駅周辺が中心というイメージは持っていると思う。ただし、時代の流れの中で求められる機能は変わってくるのではないかと。10年後を思い描きながら検討していかなければならない。

活性化のために道路をきれいにするだけでは解決しない。根本的な策を考えていかなければならない。新しいものを打ち出していかなければ都市は進化しない。

将来は農村部がまちにとって重要な位置づけになっているかもしれない。

**【委員】**

人口減少の現実の中で、都市の機能が分散していてよいのか、長期的に考えたときにどうすべきか、方向を明確にしていく必要がある。人口減に対応する手立てはどうあるべきか、中心市街地について検討するうえでも、人口についての議論は必要である。

駅前が廃れたまちは死んでしまうと言う人もいる。中心市街地が衰退するとまち全体のモチベーションも下がってしまう。

**【事務局】**

中心市街地活性化基本計画において中心市街地のエリアを定義しており、住実（充実）、観動（感動）、買適（快適）の3つのゾーンに分けて活性化の方向を示している。

**【部会長】**

中心市街地をキーワードに活性化し、誰もが集えるまちとなるようなトータルに見た都市計画が必要。都市計画マスタープランにある都市軸と帯広の森を中心とした、緑豊かな住みやすいまちをめざすことが必要ではないか。

## (2) 住宅・住宅地について

### 【委員】

住宅地と交通網は密接に関係するものである。

農村部の宅地をどうしていくかも検討していく必要がある。

### 【委員】

空き地、空き家対策のひとつとして、市で未利用の物件には資産税を割り増しし、空きが解消されたときには税を軽減するといった、空き地や空き家の利用促進のための課税調整はできるか。

人口は大きな増加を望める状況にはない。世帯数は伸びているがこの要因は高齢世帯の伸びによるものであり、高齢者世帯以外は減っている。これから更に宅地造成することは過大投資になり、更に空き家が発生することとなるため、宅地増は必要ないのではないか。

帯広の森を憩いの場として高齢者や子ども等が利用できるようにすれば住環境がよくなるのではないか。

### 【委員】

最近できてきた医療サービス機能付の高齢者住宅はよい例だと思う。ニーズにあった宅地、住宅が必要である。中心部と郊外のバランスも必要。

### 【委員】

高齢社会が進む中で、高齢者にやさしいまちづくりが必要。若い世代とのふれあいも大切である。たとえば学校の空き教室を活用した高齢者の居場所づくりなどできないか。

### 【部会長】

帯広の森の活用、高齢者が暮らしやすい住環境などは、夢のある宅地につながるものではないかと思う。

最近、中心市街地の定住人口が増えているが、年齢層の高い人が入ってくるのが多いと聞いている。これは高齢者にとって住みやすさのメリットを感じているからだと思われる。ひとつの魅力ある住宅環境の例と言えるのではないか。

稲田・下川西地区で宅地開発が進んでいるが、農村部の住宅の状況はどうか。

### 【委員】

農村部にも公営住宅が整備されている。清川、広野地区は農家後継者の若い世代が入居しているが、川西地区については市街地に勤務する世帯の入居が多い。

【委員】

中心市街地は住環境としては、駐車場が不便である。

【委員】

公共交通についての議論は車の利用者の中で進められてきた。一方の視点だけでなく、公共交通利用者の視点を加えて論議する必要がある。これからは、高齢者の自動車運転免許更新に制限がかかる方向であることもあり、車利用者でも車が運転できなくなった場合を想定しておくことも必要。

住宅地については、帯広らしさや夢があることは必要である。そのためには面的な視点での機能別コンセプトにより集約したエリア区分が必要。自分の住んでいるまちを自慢する人の話を聞くと、まちにある程度の統一した家並みのデザインがある。

【部会長】

まちの景観については、個性との兼ね合いもあるが、一定の統一感が夢のある宅地としては必要。商業地区でも同じことが言える。また、帯広ではユニバーサルデザインのまちづくりに取り組まれているが、これはひとつの帯広らしい住宅・住宅地につながるのではないか。

阪神淡路大震災があった大阪市では、経費負担を軽減するために住宅の一部のみ耐震補強する支援策を独自に行っている例がある。このような安全対策の取り組みもまちに住みたいと思わせる手法の一つではないか。

【委員】

電線の地中化も景観や居住環境にとってよいのではないか。

【部会長】

柏林台の市営住宅では高層化されているが、このように限りある土地の高度利用を図ることによりゆとりある宅地とすることもひとつの手法ではないか。

【委員】

帯広らしさについては捉え方に個人差がある。

【委員】

宅地のあり方によっておのずと住宅や人は集まってくる。

高齢者世帯では近郊の持ち家から中心部のマンションへの住み替えもある。

世帯それぞれで住みやすい環境の捉え方が違う。

【部会長】

市街化調整区域の線引きによって住環境も変わってくるが、市の考え方はどうか。

【事務局】

コンパクトシティの考え方により基本的に今後市街地の拡大は考えていない。

【部会長】

帯広らしさを出すためには、住んでいて良いと思えるイメージを持たせることが必要ではないか。

【委員】

住んでいて良いと思えるためには、住民同士のコミュニケーションがなければならない。

【委員】

コミュニケーションによってまちの目的、めざすものをはっきりさせ、個性を活かしあえるまちづくりが必要。

【部会長】

町内会未加入の人が多くなっており、地域のコミュニケーションの向上が課題にある。

【委員】

営利追求や個の尊重の傾向にあるが、大切なものを伝え続けることが必要。10年先のまちづくりに向けた意識を高めなければならない。

【部会長】

住む人の意識は重要。ハードだけでなくソフト面での住宅地を考えていくべき。

【委員】

住民同士のコミュニケーションは重要である。そのための場がなければならない。既存のコミュニティセンターとは違った機能も必要。

駅周辺の人口は増えているが、その住民がまちに出て活動することが重要である。

以前は駅周辺でも対面式の販売店が多くあり、そういう場でもコミュニケーションがあった。

【部会長】

中心市街地活性化基本計画にある住実（充実）観動（感動）買適（快適）ゾーンのつながりの考え方がよい。中心市街地だけでなく帯広全体においても応用できる考え方だと思う。

【委員】

国でも高齢者対策、バリアフリー対策の施策を打ち出している。中心市街地にも高齢者が増えてくると、それに対応した道路などの整備も必要。

【委員】

まちには様々な人が暮らしている。誰もが暮らしやすいまちにしなければならない。

【部会長】

人が多く集まる場所での交通信号機などのユニバーサルデザイン化を進めることも必要。

【委員】

特に人が集まるようなところには集中して整備していくことが必要。観光客にとっても歩きやすいまちであるべき。

（３）交通網（航空・鉄道・高速道路）について

【委員】

鉄道や高速道路のインフラ整備は充実してきている。今後はソフト面での利活用を中心に考えていくべき。

航空については、帯広の食に対する注目度が上がっている。関西方面とのつながりを深めていく必要がある。

【委員】

10年間の社会の動きは早い。それを見据えなければならない。十勝圏の物流の動きを認識し、高速道路のプラス面を導き出すことが必要。大阪方面のパワーを持ち込むことができないか。農業も作るだけでなく、売ることが大切であり、そのための交通ネットを考えていく必要がある。情報の収集も必要であり、ITなどのシステム化も検討する必要がある。

雇用の話になるが、親の介護のために一時的にパート化し、将来正社員として復帰するといった新しいシステムを考えてもよいのではないか。



**【委員】**

温暖化の影響により、農業では北海道にレタスなど葉物の生産に期待がかかってくることも考えられる。そうなる鮮度が一層重視されてくることとなり、高速交通のメリットを充分活用した物流の高速化が重要となってくる。

**【部会長】**

交通網についてはハード中心から利活用へ視点が変わってきている。情報網にも視点をおくべきか。

**【委員】**

通信インフラについては、光ファイバーが普及する中であって、農村部の普及において制度や技術的な課題がある。10年後を見据えて市全域をカバーする通信網を考えていく必要がある。地域全体の意識の高まりが必要。

**【委員】**

各交通機関のネットワークや商店街などのつながりが必要。

人口対策のひとつとして交流人口の増加策から取り組んでいく必要があるが、そのためには交通ネットワークは重要である。

空港のダブルトラッキング化については、相手のある話であり、相手を納得させるようなことが必要となる。過去にはとかち帯広空港のハブ空港の位置づけについての話もあったが、広大な土地、高い晴天率、安い地価、国際線の航路に位置するなどの素地はあり、ハブ空港をにらんだ利活用について検討することも必要。

高速道路については、帯広にとってプラスと見るべき。インターチェンジのあり方や利活用についても検討すべき。

**【部会長】**

交通網については、人やものを呼び込むための利活用を積極的に図るべき。

**【委員】**

この場で議論すべき項目かどうか分からないが、壮年学級のようなそれぞれ得意な分野を持つ人材を活かしたコミュニケーションの場を作れないか。たとえば学校の廃校舎や余剰教室を活用した地域の回遊軸のようなものを組み立てられないか。そのようなネットワークを自宅とも結んで交流してはどうか。それによってまちを歩くことによる健康づくり、バス利用の促進、生涯学習、コミュニケーションの推進などいろいろな面で効果をもたらすことができるのではないか。

**【委員】**

まちづくりにおいて人づくりは大切である。

以上